小学校・中学校のつながりを考えた伝統的な言語文化に関する指導

国語科研究会議
研究員　菅野　明美（川崎市立南河原小学校）　原　なつき（川崎市立今井小学校）
菊地　圭子（川崎市立平間中学校）　山田　祥子（川崎市立宮前平中学校）
指導主事　須山　佳代子

Ⅰ　主題設定の理由

今年度から使用している小学校の教科書には「枕草子」や「徒然草」などの冒頭の部分が掲載されている。これまでは中学生になって初めて学習する期待感に満ちて古典と出合っていた子どもたちが、再び同じ作品を学習材とするとき、果たして興味をもって学習に取り組むことができるだろうかという声が聞かれる。

小学校第３学年以上、中学校の各学年における〔伝統的な言語文化と国語に関する事項〕の「ア　伝統的な言語文化に関する事項」を比較してみると、小学校と同系統の学習が中学校において繰り返し発展した形で意図的に配置されていることが分かる。本研究会議ではア（ア）に示されている音読や暗唱の事項、ア（イ）に示されている古典のジャンルや昔の人のものの見方や感じ方などにふれる事項に着目し、小学校・中学校の同系統の学習において子どもたちが身に付けるべき力の違いを明らかにした授業を提案したいと考えた。

たとえ同じ学習材を取り上げていても、小学校・中学校それぞれで重点を置くべき指導内容を明確にすることにより、子どもたちの学習意欲を高めることができると思われる。小学校・中学校のつながりを考えた学習を工夫し、螺旋的、反復的に繰り返し学ぶことのよさを生かして、伝統的な言語文化に親しむ態度の育成をめざしたい。

Ⅱ　研究の内容

１　研究の方法

本研究会議の研究員が担当している小学校５年生と中学校１・２年生において「ア　伝統的な言語文化に関する事項」の（ア）または（イ）の事項で示されている指導内容について、学習指導要領の解説をもとに十分検討したのち、各領域の指導事項と関連付けて検証授業を行う。学年の特性を考慮し、小学校・中学校の学習のつながりを検証するために、親しみやすい古文を共通の学習材とする。

２　研究の実際

（１）検証授業１「声に出して楽しもう　音読暗唱マラソン」（Ａ小学校・５年）

①単元目標

古文の響きやリズムに関心をもち、味わおうとするとともに、内容の大体を把握しながら音読する。

②評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
古文の響きやリズムに関心をもち、味わおうとしている。	自分の思いや考えが伝わるように古文を音読したり群読したりしている。（ア）	古文の響きやリズムを楽しみ、内容の大体を把握しながら音読している。（ア（ア））

中心となる言語活動

様々な種類の古文の冒頭を音読したり群読したりする。

③学習指導計画（５時間）

第１～３時　古文を声に出して読み、グループで群読するお気に入りの古文を選ぶ。

第４・５時　グループで話し合って古文の群読をし、感じたことを伝え合う。

④学習活動の実際

第１時から第３時では、古文冒頭部分を繰り返し音読暗唱し、お気に入りの一つをグループで選んで群読作りに挑戦するという学習の見通しをもった。古文の導入として「暗唱マラソン」を取り入れることにした。「暗唱マラソン」は「竹取物語」「枕草子(春夏/秋/冬)」「平家物語」「方丈記」「徒然草」などの古文冒頭の一部を掲載した冊子になっており、暗唱できた作品をチェックしていく欄を設けている。冊子には、現代語訳だけでなく挿絵なども取り入れ、古文の世界に慣れ親しみのない子どもたちがより容易に内容の大体を把握できるよう工夫した。ところが実際に音読してみると、俳句や短歌の音読や暗唱に比べ、慣れない古文の響きに戸惑い、声が出せない子どもたちの姿が見られた。そこで、顔をあげて音読できるように拡大版を掲示したり、学習時間外にも「暗唱マラソン」に挑戦できるようにしたりして、繰り返し声に出すようにさせた。次第に、リズムに慣れ親しみ、楽しみながら音読する子どもたちの姿が見られるようになった。グループで群読する作品としては、「竹取物語」「平家物語」「枕草子(春夏)」「枕草子(冬)」「方丈記」が選ばれた。その中でも、「竹取物語」や「平家物語」は、響きやリズムのよさから、群読作りに挑戦したいという子どもたちの声が多く聞かれた。

第４時では、まず自分の考えを書き込み、それを基にグループで話し合って群読を作っていった。「平家物語」に取り組んだ４班は、男女別にかけあいをする部分を作り、声の高低を表現に生かそうとしていた。最後の「ひとへに風の前の塵に同じ」の部分は、昔の人たちが叫んでいるような様子を表現したいと考え、４人一斉に声を出す工夫をしていた。一方、同じ「平家物語」を選んだ６班は、リズムのよさを伝えるために全員で声を合わせる方法を選んだ。最後の「ひとへに風の前の塵に同じ」の部分は、一人で声を落として読むことで、悲しさやはかなさを表現しようとする工夫が見られた。

第５時での群読発表場面では、あえて発表者に語らせず、聞き手側が気付いた表現や工夫をメモしていき、交流する形をとった。そのことで、自分の群読作りと比べたり、友だちの群読をより注意深く聞こうとしたりする姿が見られた。学習の最後には「枕草子は最初苦手だったけれど、音読をしていくうちにお気に入りの作品になった。」など古典への興味が高まったことがうかがえる振り返りが見られた。楽しみながら音読暗唱を繰り返すことが、今回の学習で非常に有効であったと考えられる。

（２）検証授業２「再現、源平の戦」（Ｂ中学校・２年）

①単元目標

古典「平家物語」に描かれた情景や人物の心情を読み取り、作品の特徴を生かして朗読する。

②評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
朗読の仕方を工夫したり他の人の朗読を聞いたりすることで、古典作品への興味・関心を深めようとしている。	描写の効果や登場人物の言動の意味を考えて古文の内容を理解しながら「平家物語」を朗読している。（イ）	作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しんでいる。（ア（ア））

中心となる言語活動

「平家物語」の「扇の的」を作品の特徴を生かして朗読し、グループで発表して交流する。

③学習指導計画（８時間）

第一次　第１・２時　冒頭部分を取り上げ、「平家物語」の時代背景や思想について理解する。

第二次　第３・４時　現代語訳等を頼りに作品の描写や表現などに着目し、読みの計画を作成する。

第三次　第５～７時　グループで話し合いながら群読の工夫を考えて練習し、群読発表会を行う。

第四次　第８時　　学習全体を振り返る。

④学習活動の実際

毎時間、帯単元として「暗唱マラソン」に取り組んだ。１年生で学習した歴史的仮名遣いの復習も兼ね、声に出して繰り返し音読することで、自信をもって古文が読めるようになっていった。

第一次では、冒頭部分を取り上げて、「平家物語」全体の時代背景や思想について学習した。今とは違う考え方や、今も昔も変わらない思いなどを知ることができた。

第二次では、現代語訳や資料集、社会科の授業で学習した内容などをヒントに、「扇の的」の読みの計画を作成した。場面の情景を理解するために、「表現に着目する」「古語の意味を確認する」「擬音語・擬態語を探す」「強調する部分を考える」ことをポイントとして示した。さらに、読みの分担を考える際には、「読み担い」と「読み分かち」を行った。「読み担い」では、本文を読みながら登場する人や物をいくつか挙げ、どの部分で区切るのがふさわしいかを考え、「読み分かち」では、どのような読み方が効果的かを考え、その部分を表現するためにふさわしい読み手を話し合いの中で探っていった。ワークシートは、上段に古文（原文）、中段に現代語訳を載せ、下段には読みの分担・ポイント・根拠を書き込めるようにメモ欄を設けた。

第三次では、読みの計画に従って、グループで練習を重ねながら、より効果的な読み方を考えた。内容を理解できるようになると、生徒は様々な工夫を考え出した。読み取った心情や様子を根拠に、強弱や読むスピードに変化をつける、同じ部分をわざとずらして読む輪唱読みをする、本文を読む声に別の言葉や音声を重ねることで声のＢＧＭの役割を作るなどの工夫をしていた。中には、擬音語に合わせてピョンと飛び上がる、矢が飛んでいる音を口笛で表現する、手拍子を入れるなどの工夫も見られた。群読発表会では、それぞれのグループが読み取った表現の工夫に気付くことができた。

今回の学習では、古典の世界観や描かれた状況を読み解き、群読で表現することで、自分なりの解釈や考えをもつことができた。また、互いの表現にふれることで、表現の工夫や解釈の違いに気付き、自分の思いや考えをさらに深めることにつながった。何より声に出して読むことで、何百年も前から伝わる古典のリズムを体感し、古典の世界を楽しむことができたのではないかと考える。

（３）検証授業３「枕草子２０１１　～千年の時を超えて～」（Ｃ小学校・５年）

①単元目標

「枕草子」の作品を読み、作品を参考にしながら自分の季節感やものの見方を表現することで、昔の人や自分のものの見方や感じ方に気付く。

②評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
自分の思いや考えを表現するのにふさわしい題材や叙述を見い出しながら、随筆「枕草子2011」を書こうとしている。	随筆を書くことで、自分のものの見方や考え方を見つめ直したり、深めたりすることができることに気付いている。（カ）	「枕草子」について解説した文章を基に、昔の人のものの見方や感じ方を知っている。（ア（イ））

中心となる言語活動

経験したことをもとに、随筆「枕草子２０１１」を書く。

③学習指導計画（８時間）

第一次　第１・２時　「枕草子」の作品を読み、表現のすばらしさやおもしろさを知る。

第二次　第３～７時　作品をまねて、随筆「枕草子２０１１」を書く。

　　第８時　　完成した作品を読み合い、学習を通して感じたことを伝え合う。

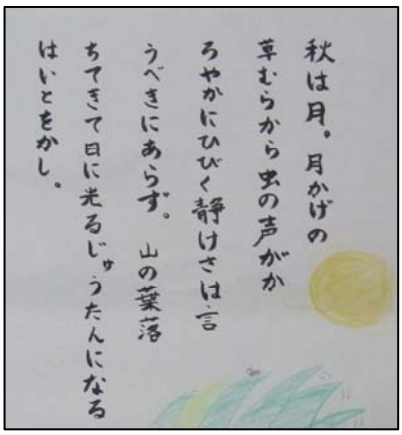
④学習活動の実際

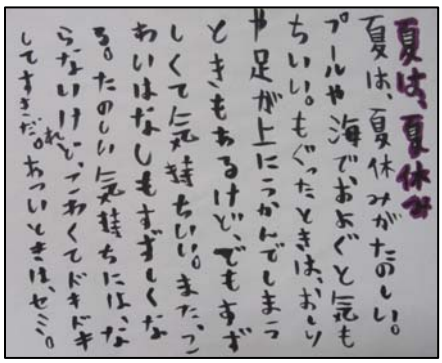
第一次では、「枕草子」の作品から、「春夏/秋/冬」「虫は」「うれしきもの」を紹介し、共感するところやおもしろいところに着目させた。現代語訳や写真・挿絵を活用することで、子どもたちは作品の世界を豊かに想像することができた。また音読を繰り返し行う中で、子どもたちは作品の中からお気に入りの言葉を見つけ、日常の中で「をかし」「わろし」といった言葉を使う姿が見られた。

第二次では、「枕草子」の作品を真似て、オリジナルの「枕草子２０１１」を作成した。「春はあけぼの」や「～なもの」「～なとき」をテーマとし、書く事柄を集めていった。五感を使って感じたことを書き留めたり、普段感じていることやふと思い出したことなどをメモに残しておいたりすることが、その子らしい表現につながっていった。中には「夏は空。青き空に一すじ長くしっかりとうつる飛行機雲はいとをかし。」「かわいらしさは言ふべきにもあらず。」といったように、「をかし」「言ふべきにもあらず」などの言葉を用いて表現する子もいた。

互いの作品を読み合うことを通して、子どもたちは作品の中に見えるその子らしさを見つけたり、自分との感じ方の違いや似ているところを感じ取ったりしていた。また学習全体の振り返りでは、千年前と現代とで感じ方が似ていることへの気付きや、千年前に使われていた言葉への興味、様々なものの見方や感じ方があることへの気付き等が子どもたちから挙げられた。

学習を深めていく中で一番変化が見られたことは、子どもたちと古典作品との距離である。普段使わない言葉と出合った子どもたちは、最初は読みづらい、意味が分からないといった理由で作品に興味をもてずにいた。しかし現代語訳や写真・挿絵を活用し、繰り返し音読を行っていく中で、少しずつ安心して声を出し、お気に入りの言葉を見つけるなどして興味・関心を高めていった。また、作品を真似て随筆を書く過程の中で何度も「枕草子」の作品を読み直したり、出来上がった自分の作品と比べたりする子どもたちの姿が見られた。古典作品を真似て表現活動をすることが、さらに古典を身近に感じることにつながったのではないかと考える。





子どもの作品

（４）検証授業４「昔話のルーツを紹介しよう～古典の様々な作品について知る～」（Ｄ中学校・１年）

①単元目標

現在も読まれている昔話と古典とを読み比べ、その内容や面白さについて紹介する。

②評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
古典の文章に関心をもち、その内容を進んで紹介しようとしている。	現在も読まれている昔話と古典を読み、友達に紹介するという目的に応じて必要な情報を読み取っている。（カ）	古典にはさまざまな種類の文章があることを理解している。（ア（イ））

中心となる言語活動

昔話とその原典の内容の違いについて読み取ったことを、友達に紹介する。

③学習指導計画（４時間）

第１時　　古典は歴史的仮名遣いで書かれていることを知り、現代仮名遣いとの違いを理解する。

第２・３時　昔話とその原典の内容の違いについて読み取ったことを、ペアでの話し合いによりまとめ、各自のワークシートを完成させる。

第４時　　昔話のルーツになった古典について、その内容と面白さ、内容の相違点を紹介する。

＊古典と読み比べた９つの昔話＊
「かぐや姫」「こぶとりじいさん」「舌切り雀（雀の恩返し)」」「わらしべ長者」
「鉢かづき」「ものぐさ太郎」「一寸法師」「浦島太郎」「たにし長者」

④学習活動の実際

第１時では「『暗唱マラソン』をもとに『歴史的仮名遣い』と『現代仮名遣い』を学ぼう」というねらいで授業を行った。「暗唱マラソン」の中に「いろは歌」が入っているので、繰り返し音読をしていく中で、歴史的仮名遣いが自然に読めるようになっていった。このことから歴史的仮名遣いと現代仮名遣いの違いに気付くことができた。

第２時は「今までに読んだことがある『絵本』と『古典』を読み比べよう」というねらいで学習を進めた。まず、今まで読んだことがある昔話を思い起こすようにさせた。次に、９つの昔話を基にして書かれた 20 冊の絵本から自分たちの紹介する絵本を１冊選ばせた。そして、その絵本の原典にあたる古典の現代語訳をペアに一部ずつ渡したところ、クラスは静まりかえり、細かい違いを見つけて線を引きながら、真剣に読み込む姿が見られた。絵本と古典の現代語訳を交換しながら、ともに黙って読み比べをしているペアもいれば､一人が絵本の文章を読み上げることで違いを探し出すペアもいた。難しいと思うところは同じ古典を選んでいるペアに聞きに行き、自然と学び合いができた。

第３時の授業では、絵本と古典の相違点を膨らませるように、発表原稿を作った。相手を意識した発表内容を考えるときに、特に｢違い｣に注目しているペアが多かった。後半では、同じ古典を選んだ他のペアとグループをつくり、お互いの絵本を披露し合う機会を作った。原典としている古典は同じでも、主人公の設定から異なっている絵本もあり、絵本による違いに気付くことにつながった。絵本と古典、絵本と絵本のように、様々な視点から読みを深めていくことができた。

第４時では、自分たちが読み比べた絵本と古典の相違点や、第３時でグループを組んだペアの絵本と比較して気付いたことを、絵本を広げて示しながら、分かりやすく紹介することができた。

自分たちが選んだ昔話の絵本と古典の違いを紹介するという目的を明確にして読むことにより、その内容や面白さを説明するために必要な情報を読み取ることができた。また、「『絵本』と『古典』を読み比べよう」という入り口から、昔話という形で今も身近にある古典に目を向けさせ、より多くの古典を学びたいという意欲を引き出すことができる授業となった。

Ⅲ　研究のまとめ

検証授業１と２においては、音読や暗唱の事項（ア（ア））について検証した。初めて古文にふれる小学校５年生においては、挿絵や現代語訳を効果的に提示することや感じたことを交流し合うことなどを通して古典に親しませ、声を合わせて読む楽しさや言葉のリズムや響きを味わうことを重視した学習を展開した。中学校２年生においては、作品について自分なりに解釈したことや感動したことなどを思いや考えとしてまとめた上で、表現性を高めて朗読することを重点に置いた。学習材について

は小学校では親しみやすい様々な古典を部分的に扱い、気に入った作品を選択させることが興味・関心を高めるために効果的であった。中学校では朗読で表現することに適した学習材に絞り、朗読の仕方を工夫することや友達の朗読を聞いて表現の違いに気付くことが、作品についての見方を深めることにつながった。

検証授業３と４においては、昔の人のものの見方や感じ方、古典の様々なジャンルを知ることをねらいとした事項（ア（イ））について検証した。小学校５年生においては、「枕草子」の現代語訳を読んで昔の人の思いを身近に感じることを通して、自分の物の見方や考え方を見つめ直して書く力を育成することに重点を置いた。中学校１年生においては、現在も絵本などの形で出版され、広く知られている昔話と古典の現代語訳を読み比べることで、目的に応じて必要な情報を読み取る力の育成をめざした。小学校では作者の考えが明快に伝わり、文体の特徴を自分の表現に生かして書くことができる随筆を学習材として扱うことが有効であった。中学校では昔話を学習材としたことで身近な生活の中で今もなお息づいている古典に目を向けさせることができ、比べて読むことや考えを交流することへの意欲を高めることにつながった。

小学校と中学校のつながりを検証することにより、（ア）の事項に関しては、小学校での音読の経験が古典を学ぶ意欲を高め、中学校での朗読をより豊かにしていく可能性があることが分かった。さらに中学校で扱う歴史的背景を踏まえることにより、表現が広がることが期待できる。また、（イ）の事項については、「書くこと」や「読むこと」などの領域の学習と関連させ、自分の考えを表現することを通して指導することが有効であることが分かった。今後、伝統的な言語文化に関する指導を効果的にすすめていくためには、小学校と中学校の間で情報交換を行い、連携を図っていくことが一層望まれる。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼を申しあげます。

【参考文献】

文部科学省　「言語活動の充実に関する指導事例集　【小学校版】」　平成 22 年
文部科学省　「言語活動の充実に関する指導事例集　【中学校版】」　平成 23 年
神奈川県総合教育センター　「平成 22 年度　長期研究員　研究報告　第９集」　平成 23 年
大島建彦　『日本古典文学全集　御伽草子集』　小学館　昭和 54 年
小林智昭　『日本古典文学全集　宇治拾遺物語』　小学館　昭和 54 年

【指導助言者】

川崎市立小学校国語教育研究会長（川崎市立中原小学校長）　伊藤　磨理子
川崎市立中学校教育研究会国語科部会長（川崎市立菅生中学校長）　松井　隆夫